

中国防空識別圈設定の内幕

漢和防務評論 20140124（抄訳）

平可夫

阿部信行

（訳者コメント）

漢和防務評論に中国防空識別圈設定の内幕と題する記事が掲載されましたので紹介します。

記事によると、習近平は厳しい国内問題から人民の目をそらすために対外強硬政策を採らざるを得ないとしています。

記事は、習近平は文革時紅衛兵であり、負の遺産が刷り込まれた人物であると断定しています。

漢和防務評論英文版 2013 年 8 月号及び中文版 10 月号は、中国軍が防空識別圈設定を計画中であることを独占報道した。この重大なニュース報道は、近年の漢和の報道の中で最も反応が多かった。多くの国家、特に海洋を隔てて中国と接する国家の国防部官員はしばしば電話で詳細な事情を聞いてきた。多くの国の記者たちは、中国国防部の記者会見の場で質問を投げかけ、その後共同社が同じ報道を転送した。

KDR が把握した防空識別圈設定公布に至るまでの中国軍の内幕は以下の通りである。

1. KDR が防空識別圈設定に関する原本資料を見た限りでは、識別圈設定の担当部門は空軍指揮学院の専門家が主であった。当然最終決定は総参謀部が行った。初期の計画案には“外国の航空機が防空識別圈を通過する際は、必ず中国側に通報するか飛行計画を提出しなければならない”との内容は含まれていなかった。このことは、この条文は後で付け加えられたものであり、政治的に強硬な意思決定に基づくものであったことを意味する。しかも如何なる国際法にも依拠せず、国際慣例も先例もないことから、この防空識別圈設定は、周辺国の全面反対を引き起こし、如何なる国家の支持もなく、如何なる国家も遵守を表明することはなかった。当然防空識別圈設定自体は、多くの国も行っており、異議を唱える対象とはならない。（米国を含む防空識別圈の通報制度とは、米国本土に向けて飛行する航空機は事前に通報が必要であるとする制度である）
2. 防空識別圈の設定に関して、本来の計画は、一定期間、内部で討議を行い、11 月までに公布する計画であった。その理由は、その一；三中全会が終了し、

習近平新政権は軍の支持を必要とし、外部との摩擦が日増しに増大していた。その二；決して誇張するわけではないが、メディアに事前に漏れたことと大いに関係がある。ある国は政府レベルから直接中国側に問い合わせた。漢和及び共同社の報道は事実か？等々。これによって中国側は、すでに漏れてしまったと判断し、早く公表して主導権を握った方が有利であると考えた。

本誌が問題とするのは以下の通りである。本誌が入手した原本資料（原案）（漢和英文版 8 月号、中文版 10 月号参照）には、“外国の航空機が防空識別圏を通過する際は、必ず中国側に通報するか飛行計画を提出しなければならない”との条文はなく、後で追加されたものである。その結果、中国の国際イメージに相当悪影響を与えることになった。”中国防空識別圏設定”の官方声明に対して、多くの国は、この条文を非難したのである。

本誌の結論は以下の通り。この条文は、日本、韓国、米国、オーストラリア、南シナ海国家等、及び周辺各国を不必要に刺激し、これらの国家は、一致して遵守しないことを表明した。B-52 爆撃機、日本航空自衛隊機は何度も無通告で中国防空識別圏に進入した。なぜか？

習近平は、就任以来、多くの国際問題について態度が相当 **Aggressive** であり、彼は公開の場で何度も”戦うなら、勝たねばならない”ことを強調している。民族主義教育を受けた中国民衆ならば別におかしいとは思わないが、外国語に翻訳した場合、**To prepare the war! To win the war!** となり、これはどういう意味かと西側媒体は問題視した。冷戦後、如何なる国の大統領も、首相も、このような好戦的な言論を頻繁に発したであろうか？

したがって本誌は、各国に疑念を生じさせた条文が、”原案”が正式に”立案”されるまでの間に、強硬な軍人や民族主義者の情緒を満足させるために付加されたものとする。

中国の軍人学者たちは、このような結果になることを本当に知らなかったのだろうか？一、国際法の根拠は何か？二、国際慣例はあるのか？三、他国が通報しない場合、どう対処するのか？その結果、中国人の重んじる面子はどうなるか？

本誌はこのような結果になった原因を以下の通り分析する。

A. 第一、これは習近平体制の基本的特性である。彼が就任する前、本誌は紅二代の持つ独特の個性を分析した。厳しく指摘すると、現在の中国政治は、紅衛兵が国を治める時代になった。習近平の経歴、その他主要な指導者の経歴を見ると、当時の強烈な負の烙印が押されていることが分かる。紅衛兵、知識青年、工農兵大学生、紅二代、造反派たちであり、基本的特徴は、造反、現行の国際法規及び制度の無視、尊大さ、である。

最近、本誌の主幹が中国で著名な多くの政治、外交学者と問題を論じた際に発見したのは、彼ら異常に尊大で、自己満足していることだ。彼らの一部は、西側で教育を受けているにもかかわらずである。インドや日本を見下し、米国は間もなく衰退し、中国はすでに世界第二の大国に勃興したと認識している。したがって防空識別圏設定に”通報”条文が付加されたのである。これは尊大な大国意識の表れであり、外部世界を理解しておらず、自己の実力を過信しているのである。

B. 本誌が習近平体制最初の年の対外、対内政策を、次に示す二つの体制と比較したところ、両体制と極めてよく似ていることを発見した。一つは半年前に生まれた金正恩体制でありもう一つは 1983 年時代のソ連アンドロポフ体制である。金正恩体制は不必要に誇張して外部世界を刺激し戦争準備を行っている。ソ連アンドロポフ時代はブレジネフ時代よりもはるかに対外政策で他国を脅かす姿勢を採り、アンドロポフは談話の中で何度も世界大戦勃発の可能性に言及した。また部隊に戦争準備を命じ、KGB は、西欧各国の秘密の拠点に武器弾薬の隠匿を開始した。アンドロポフの好戦的姿勢は北朝鮮に影響を与え、当時北朝鮮は、武力で”南方を解放する”可能性をさぐった。

金正恩及びアンドロポフは真に好戦的であり又あったのか？アンドロポフに接見したことのある元 KGB の退役官員は、”彼は実際は非常に聡明で全局を理解していた人だ。軽率に決定するはずがない”と述べた。

正にアンドロポフ本人は、ソ連の体制内部に存在する巨大な矛盾、経済的破綻を見抜いていた。この年、西シベリア研究所の多数の学者は、「ソ連経済秘密報告」を発表し、当時のソ連の政治、経済制度は、多様化する社会の発展に適応できないことを明確に警告した。言い換えれば、アンドロポフはソ連崩壊を見通していた。したがって彼は、警察力を大幅に拡大した（習近平と極めて似ている）。更に異なる政治的意見を持つ者を粛清した。彼は体制内改革を行おうとした。この点も習近平の中共によく似ている。もし彼がある期間生きていたならばの話であるが。アンドロポフや金正恩が対外威嚇政策を行った或いは行っているのは、軍人及び社会の関心を凝集し、内部の各種問題を解決するためである。再び習近平を見ると、就任一年、如何にすれば軍人の支持を得て権威を確立することが出来るのか？中国国内では頻繁に爆発事件が起き、少数民族は反乱し、政府への直訴請願は激しく、労働者のストライキは多発している。中国経済は下降を始め、社会の不安定指数は増加している。”攻堅作戦”と称する新たな改革が開始されたが、隠れた堅固な反対者が多いため、手を付けたのはわずか国有企業改革のみである。如何にしてこれらの難関を突破するか？習近平は対外威嚇政策で人民の目を外に向ければ、外部からの圧力は大きくなり、人民の意識を凝集することが出来ると考えている。習近平が学習したのは毛沢

東である。したがって中国は四方に敵をつくるのを恐れない。これは故意に行っているからだ。

このように理解すると、防空識別圏設定における” 通報” 条文の付加、南シナ海国家を威嚇するための中国空母の南下、頻繁な軍事演習、台湾に対する新たな軍事的威嚇等々は、道理にかなっていると言えるのだろうか？

以上